

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成15年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第43巻11月号(通巻532号)

風土

11



芙蓉咲く

神蔵

器

芙蓉咲く死後も一歳上の妻

ふるさとは盆の過ぎたる風の吹く

柿を剥くナイフの先に新都庁

拈華微笑大僧正の大根蒔く

不忍池しのばずに月の出遅き子規忌かな

子規庵に腰なき忘れうちはかな

塩ふれば桂郎の来て衣被

満月に雲の高波しぶきかな

台風の目の中にして星一つ

新豆腐老いて子に従つくいはれなし

納骨の切火とびつく唐辛子

直筆の晶子の歌や曼珠沙華



竹間集

同人作品



あほくさ

島谷 征良

あほくさの教師の顔や夏休み
昼寝より覚め高き日は高きまま
咲きそめや大いに揺れて夾竹桃
踏切に及びてゐたり草いきれ
冷房や硝子の中の出土品
新婚以来三十年この扇風機
桂郎の目とはいかなる生ビール

秋の雷

斉藤 小夜

吹き上げて来る潮風や稲の花
紗のごとき霧降りて来る松虫草
二代目の銀座の柳風は秋
本堂へかけ込みてをり秋の雷
青くわりん神蔵宗家分家かな
わが齡諾ひみたり白芙蓉
木賊むら秋の水音抜けてゆく

薄

徳丸 峻二

九十九折登りつめたる初紅葉
鈴虫の鳴き出て妻の黙破る
竜胆を摘み来て次のバスを待つ
受け売りの辻棲合はず蚯蚓鳴く
曳き売りの八百屋まだみて獺祭忌
秋の雨探し当てたる古書抱いて
薄原刈つて水糸張られけり

つくつくほふし

宮川みね子

秋螢ひとつへことばあつまれり
はつあきの手にほぐしたる麴かな
観音の胴のくびれや白桔梗
方丈につまづきてをり秋の雷
桂郎句碑古りてからすうりの咲く
葬列のしんがりをゆく秋の蝶
つくつくほふしつくつくほふし弔辞さく

丹後半島の秋

浜 明史

虎杖や薄や咲いて日本海
秋の潮込めり橋立一字観
稲稔る熔岩を抱へし棚田かも
先陣の鴨の昼寝や熔岩の磯
熔岩磯の秋や船虫駆け上る
丹後大仏仰げば白し秋の声
僻村や軒に唐辛子吊し柿

宇良の秋

浜 福恵

舟虫ののぼりつめたる熔岩ラバの階
竹は春徐福の宮の木雨かな
海道を津つ母もへ一里や小鳥来る
磯釣イソツリの人を眼下に葛の花
絵馬堂宇良神社 三石に掛かる蓑亀宇良の秋
乙姫にうすくれなるの椿の実
鳴子鳴る浦や嶋子の里日和

秋の声

蓮尾あきら

のぞき見る阿蘇の火口や秋の声
秋風やひとり杭打つ音を立て
小屋組んで秩父も鄙の下り築
秋灯し昨日に似たる日記書く
夜の秋や明日発つ旅の地図ひろげ
夏草や水割つてゆく鯉の背な
はためきて芝居ののぼり秋祭

秋遍路

— 柴田 由乃 —

蘇鉄咲く説法石の艶光り
秋麗や愁眉のひらく海の色
波音に負けじ今際のつく法師
さやけしやモンローもゐて天井絵
柚子は黄に浮世のがれて南無大師
草も木も仏と拝む仲の秋
雲わけて観月坂に月の額
鬼の子や巨木のもやふ大師堂
巡錫の鈴の音さやか辰の刻
コスモスや堂へせり出す岩襖

霧時雨納経待ちを岩の穴
秋遍路手を引く母も父もなき
尾花照るあはれ子供の墓八基
椿の実ぶらり寺塀崩れ口
秋天へ鋏の入らぬ空也松
安養の棕櫚刷毛つとに雁来月
秋うらら亀あるだけの首のべて
梅紅葉忘れ地蔵の笑壺かな
おんころろ念仏三昧白芙蓉
なむ大師繁多の中の秋三日

山河集

同人作品



神蔵 器選

三 毳^か山万葉人の葛匂ふ
小林 共代

秋耕や三毳の山の裾を打つ
例幣使街道照らす烏瓜
新涼や山湖に鎮む樹々の影
星流る青墨匂ふ父の部屋

尼寺の山門の布施曼珠沙華
平田 紀美子

さゆらぎの風の襲の蓮ひらく
胸突坂下りて芙蓉の白さかな
芭蕉庵に昼の蚊遣火焚きにけり
父母の好物もあり草の市

修験者の懸腕直筆梅雨の明く
大森 美恵

秋の雲ヨットのよぎる潮目かな
浜豌豆中の立膝暮るる海

提灯に風の来てをり盆支度
放水のダムの音のみ霧襖

山本 浪子

緋緘の鎧の紐やカンナ咲く
秋暑し庫裡の神将二体欠け
伊予今治金星町や秋簾
香煙の真直ぐ上がる墓参かな
ピアノ教師慕ひし昔ほしまつり

内山 まり子

終戦日油滴天目とりいだし
白萩の風に一睡うながされ
秋高し橋下四つ手網漁場
秋蟬の一呼吸おく静寂あり
夏休み水質検査の中学生

風土独語／神蔵 器



例幣使街道照らす烏瓜

小林 共代

例幣は朝廷より毎年の例として神にささげる幣帛、九月十一日に伊勢神宮に奉るものであったが、江戸時代には日光東照宮にも例幣を下した。例幣使街道といえは日光例幣使街道である。

日光街道は松平正綱が家康公への報恩のため植えられたと伝えられる一万五千本もの杉並木で知られるが、街道筋で烏瓜が見られるのはどのあたりであろうか。日光にほど近いところより私は例幣使街道の宿場町として発展した佐野から日光街道に入るあたりではないかと思われる。

作者は日光へ向かう途中、佐野あたりで、すでに真っ赤に色づいた烏瓜を見掛けた。あまりにもあざやかな朱色に車を降りて烏瓜を眺めていると、このあたりがかつての例幣使街道であったことを思い出した。衣冠束帯に肅々と秋日の中を進む例幣使の行列、烏瓜とは何の関係もないが、見事な照応である。

修験者の懸腕直筆梅雨の明く

大森 美恵

懸腕直筆は書道で、腕をあげて肘を脇から離し、筆をまつすぐ立てて書くことである。太字を書くのに適しているといわれる姿

勢である。この句は修験者であるので、如何にも豪放磊落、一気呵成の筆致が眼前に見える。梅雨のうつつとうしさも吹き飛ばす快句である。

遺されて女腰 太稲の花

禪 京子

遺された場合、男と女では、どうも女の方が強く遅いようである。

掲出句は農家の主婦か。夫に先だたれて、悲しんでいる間もなく、夫の分まで田を耕し、畑にも励んで家事は勿論、子供の養育をして来た。力仕事が多いからどうしても腰に肉がつく。女であれば容姿を気にしないことはないのだが、生きてゆくためには、そんなことにかまってはられない。

今年は冷夏、秋になつて少し好天が続く関東では稲もやや持ち直し、遺された女の苦勞に報いるかのごとく稲はさかんに花をかけている。微苦笑の句である。

病室に人入れ変はり虫時雨

仙田 孝子

病状が重いと個室がよいが軽いと大部屋の方がよいものだ。同病相哀れむというのか同室の入院患者はすぐ親しくなるが、別れることも早い。同室で一日に二人退院するなどということもある。喜ばなければならぬことだが、残されると淋しいものである。作者は登戸病院に入院されている。病室に入れ変り、一日も早く退院できますよう祈っている。

自分のこと自分で出来て敬老日

松井 ふみ

自分のことが自分で出来ることは当り前のことであるが、年をとるとなかなかそうともゆかない。

松井さんは八十歳を一つぐらい越えているかも知れないが、杖をつきながらも元気に横浜の朝日カルチャーにも来てくれている。有難いことである。

盆僧を迎ふ A 4 番口 にをり

遊橋恵美子

A 4 番口は地下鉄の駅の出口であろう。盆僧は檀那寺のご住職。毎年棚経に見えるのであるが、年に一度ぐらいでは複雑になった地下鉄は目的の駅で下車しても出口には迷うものである。住職から前もって確認の電話があつて、作者は A 4 番口で盆僧を迎えることになったようである。

東京は新の七月の盆。街には盆の気配もなく、人々はあわただしくただ行き交っている。作者一人ぼつんと人込みに押し出されて来る盆僧を約束の A 4 番口で待つている。

カンナ燃ゆ棟方志功の丸眼鏡

中村 洋子

棟方志功は初め油絵を志し、二十三歳で官展に入選した。その後版画に転向した。ひどい近眼であつたためのものである。

小さな御幣を下げた鉢巻きをし、極度に板に顔を近づけ、嘔みつかんばかりの形相でのみをふるっている。太い黒ぶちの眼鏡は必要欠かせないものであつたが、志功のトレードマークみたいな

ものであつた。谷崎潤一郎の『鍵』の挿絵にも、女の白い腹の上に、例の太い黒ぶち眼鏡がでんと置かれている。

志功の版画の中にカンナが登場するかどうか、私などはほんの一部の作品しか見えていないので解らないが、仏やいろいろの作を彫っている志功の版画の背景にカンナは似つかわしいのではない。赤の原色を好み、己の感の鋭さを信じ、対象の間に何ものもはさまず、眼鏡が板にぶつかるほど近くして、全身で彫り続けた。カンナの厚い燃えるような朱は季語としても成功であつた。

痛む歯に物が当りし残暑かな

根岸 善行

意地の悪いもので、痛む歯にふれないように触れないようにしているのに、かえつて物が当つて飛び上がるほどの激痛に襲われる。残暑も身にこたえる昨日今日である。

蛸壺の浜辺に踊り櫓立つ

平野 官爾

蛸壺は勿論蛸を捕るための素焼の壺で、多数を幹縄につけて海中に沈め、蛸の入つた頃をみはからつて引き上げる。

蛸壺の深さは七、八寸（一寸は約三センチ）、口径は四、六寸、新しいものはしばらく海水中につけてフジツボや石灰藻などを付着させて目だたなくさせる。特に変わったものではないが蛸の穴居性を利用して蛸の入りよいような壺からなまめかしいイメーじがある。そうした蛸壺の引き上げられている浜に今宵は踊り櫓が立った。蛸壺と踊り櫓は全く異質のもの、しかし両者には目に見えないが確かなつながりがある。これも見事な取合せである。

風土集



神蔵器選

小津安二郎生誕一〇〇年展

いかづちや遺品に「へその緒」「小遣帳」

東京

遊橋恵美子

青胡桃「森のレストラン」開店す

花木権咲かせてもんぢやストリート

高く盛る仏の飯や原爆忌

盆僧を迎ふA4番口にをり

今朝秋の手をつく上り框かな

川崎

鈴木庸子

盆棚へ仏たひらにはこびけり

脚太くおほぜい迎ふ茄子の馬

娶る気のなく存分な日焼かな

耕地いま工業団地カンナ咲く

カンナ燃ゆ棟方志功の丸眼鏡

横浜

中村洋子

花火揚ぐ地球に戦ありにけり

修正液吹いて乾かす初嵐

花つけられしまま刈られをり赤のまま

花カンナ港に入る白き船

痛む齒に物が当りし残暑かな

上尾

根岸善行

父の背のまだ見えてゐる魂送

女にはなれず男の遠花火

蝸の来て美しく弔ひぬ

盆踊北海道のだ真ん中

炎帝へ赤きスカート翻す

高槻

浅田光代

蟬しぐれ僧形文殊菩薩かな

片膝を抱きし羅漢秋の風

末つ子の胸を濡らして墓洗ふ

奥嵯峨の門低き家木権咲く

蛸壺の浜辺に踊り櫓立つ

東京

平野官爾

秋暑し同じ高さの六地藏

根かぎり生きし証しの大文字

迎へ火や仏に近き老が焚く

空海の山

池田 光子

空海の山ふところや田水張る
下萌や一町ごとの石塔婆
千仞の谷の底ひの春田打つ
念珠編む指しなやかに春の雪
ひるがへる僧の衣に花の塵
おはぐるや渡しの跡の石の杭
笈摺をぬぐ宿坊や夕牡丹
学僧が下駄買つてをり町薄暑
百幹の杉の雫や梅雨明ける
槓売りの声の涼しき一の橋
かなかなや無縁仏の万の石
朝涼の風の湿りや奥の院
まよひ込む奥の院てふ木下闇
千年杉の風音をきく蟻地獄
信長の墓光秀の墓五月雨る



受賞の言葉

残暑の厳しい一日でした。母の介護から戻ると、速達便が届きました。早速開封すると、「桂郎賞」の文字が飛び込んできま

まつすぐに夏の雨降る高野山
 空海の御廟を包む夏の霧
 木菟の闇貧女の一灯ゆらぎけり
 弘法の腰かけ石や苔の花
 炎天やリユツクはみだす高野楨
 高野山霊宝館前落し文
 ふるさとの高野は青し朴の花
 日の出待つ泰山木の一花かな
 現世の山をはみだす朴の花
 空海のこゑかも霧の流れゆく
 奥の院ぬけ来て釣瓶おとしかな
 息白し僧百人の読経かな
 足跡の真直ぐに雪の納骨堂
 笹子鳴く大樹の洞に石仏
 大塔の両界曼陀羅春の雷

した。まさに青天の霹靂。暫くは茫然自失。信じられなくて、何度も文面を読み返しました。

桂郎賞への応募のきっかけは、命の宣告を受けたにもかかわらず、頑張る母の姿に感じるところがあったからです。時には、母の介護に手を取られ、俳句に集中できない日々もありましたが、今、入選という形で報いられて大変嬉しく思います。

これを機会に、より一層の精進を重ねていく覚悟です。

器先生をはじめ、選考委員の皆様方に深く感謝を申し上げます。